

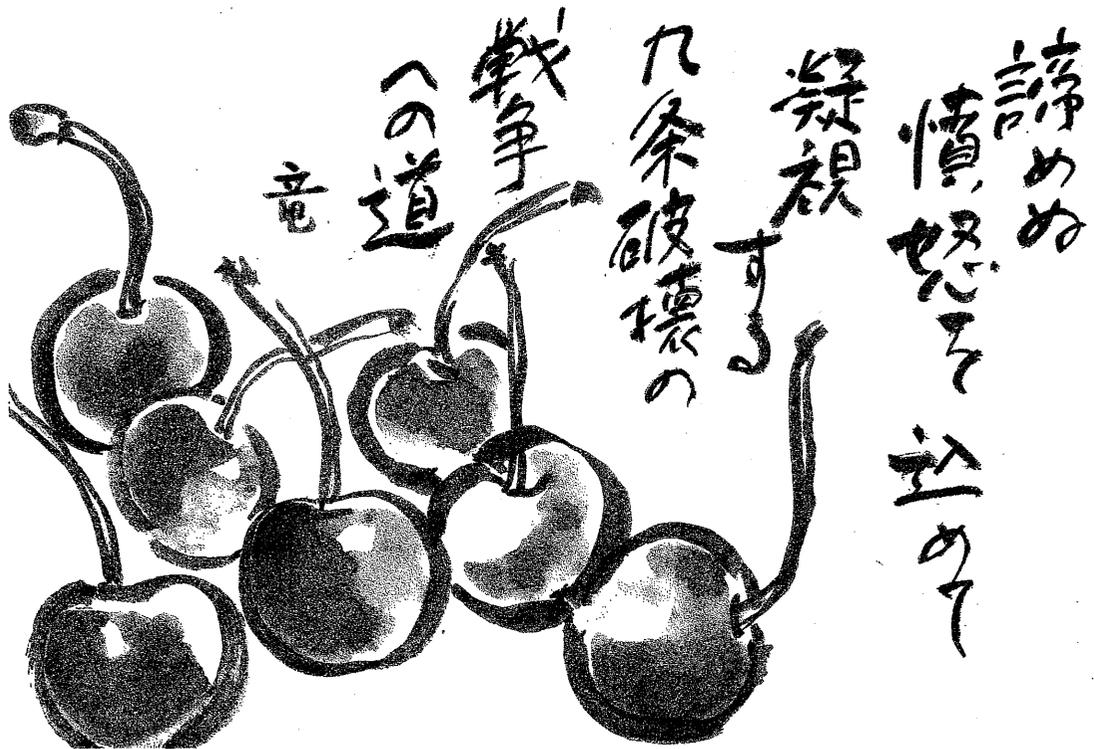
# オリーブの樹

第130号

2015年7月12日

## شجرة الزيتون

早期釈放！ 重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



### 目次

- P 2 暑中お見舞い 重信房子
- P 3 5月6月の歌 重信房子
- P 4 独居より 重信房子
- P15 読んだ本 重信房子

重信房子さんを支える会

重信 房子

夏草をかき分けて立つ岬から地中海臨み君と見し落日

夏立ちぬイマジンの歌口遊みすずらん群れ咲く細き道行く

アカシアの散り敷かれた白き坂道を隊列揃えて囚徒らが往く

掛け布団日向の匂い連れ戻る独房に一瞬夏草香る

西方の燃える雲間に彼岸より光が届く君の命日

獄舎出でふいの香りにふりむけばクチナシの白咲き初むを知る

再会を誓いし友逝き一周忌徹夜で語りし日々又うかぶ

ご無沙汰の友の入院知る朝に草に隠れし白百合みつけれし

列島に繰り出すおみな六・二〇紅蓮の憤怒ヒューマンチェーン

### 五月六月の歌

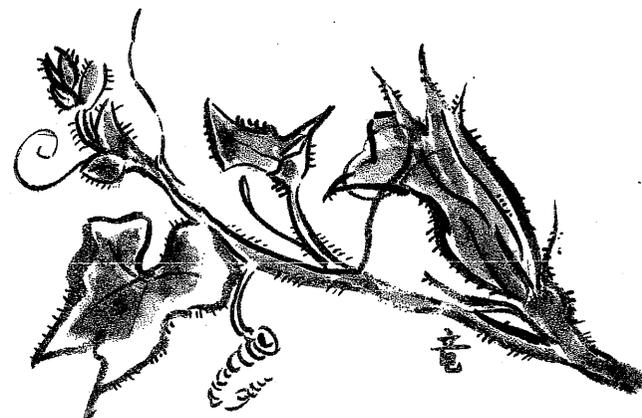
## 暑中御見舞い申し上げます

戦後七十年目を迎える今日の日本は安倍内閣政治の異常さを日々さらしています。派兵・軍事加担を「積極的平和主義」と言ったり、「国際平和支援法案」と命名したり、「砂川判決文」で問われてもいない「集団的自衛権」を強弁してみたり、憲法学者の「集団的自衛権の行使容認は違憲」にも耳をふさいで「人選ミス」と言ってみたり、これが安倍内閣の「美しい国」「品格のある国」の現実です。九条日本はこれまでも十分生かされてこなかったけれど、瀕死の危機にあります。しかし、「国会会期延長」は益々阿部政治を暴露していくでしょう。暑い暑い夏共に元気になり切っていきたいと思えます。私も戦後七十年自らの生を重ねて、ふりかえっていく夏としていきます。皆様の御健勝を祈ります。

七月十二日

房子

七十年戦後の年に我が命重ねつ生きん九条日本



独居よい 5月8日—6月30日

### 中東の混迷の根本は、米欧政府によって「ユダヤ人虐殺」の責任をパレスチナに押し付けてきた「イスラエル建国」の植民地政策にある

重信 房子

5月8日 連休中に届いた資料・雑誌・パンフを受け取りました。「はなかみ通信2015初夏の巻」ありがとうございます。

ポピーは昔私も庭一杯に咲かせ、人々が立ち止まって眺めるほどでした。5月のアラブにはポピーに似た本物の白いけしの花や、アネモネ科のけしの真紅のような花が一杯咲きます。こんな高原でリッジ闘争の戦士たちが最後のフォーメーションを繰り返していたのだな……と思ひ至る5月です。

ネタニヤフが「組閣政権発足」の見通しの記事。5月14日の「イスラエル建国」記念までとの思惑でしょう。極右「ユダヤの家」を加えてなんとか成立する政権は「パレスチナ和平」交渉反対内閣です。ネタニヤフの暴走が危険なパレスチナ。ナクバの5月、ガザの被害は再興復旧されずにいるというのに。

「情況」5月号も入手しました。私も「安倍首相の中東外交とイスラエル」を頼まれて5月号に書きました。「紙の爆弾」「地域アソシエーション」「支援連ニュース」「情報センター通信」なども今日受け取りました。まだ連休の続きのような週末、さっそく楽しみに読みます。

5月11日 5月の丁度さわやかな季節に珍しく日本列島に台風が接近中とか……。それも連休明けで立夏も過ぎて夏暦なのでしょう。今日は髪を切りました。一年位切らずに伸ばして一つに束ねていたのですが、夏でベリーショートにカットしました。

新聞では安保法案自公で合意し14日閣議決定していくとのこと。国会での丁寧な論議は自公談義程なされず、押し切っていくのでしょうか。訪米中の「夏までに成立させる」とか、「自公合意」で野党も国民も眼中にない「安倍方式」が日本のあり方を変えていくのを日々新聞で読むばかり……。なんとも口惜しいことです。今年の憲法記念日前の例年の憲法世論調査では改憲不要が必要を上回っていました。ことに9条改憲反対は63%、変える方がよいは29%です。すでになし崩し改憲は進み、既成事実か

ら明文改憲へと安倍方式は国民を無視して、何でもありが一方的に進んでいます。沖縄の叫びに報復的な行動も続きそう……。

連休中資料「フォーリンアフェアーズ」など読みつつ中東情勢が気になっています。

ヤルムークのパレスチナ難民キャンプはISに90%制圧されパレスチナ勢力がシリア軍と組んで反撃中とか。ISへの空爆、シリア内戦の激化、サウジやトルコの強硬なふるまい。「宗教戦争」は鎮まるところか益々拡大中です。米をはじめ「軍事的結着」に拘泥し逆に戦場を広げています。

イスラエルは80年代イラン・イラク戦争が始まった時「イスラエルはイランとイラクがともに血の氣を失うまで血を流しあい続けるのを喜んで眺めますよ」とイラン・コントラ事件を仲介して武器供与にかかわったイスラエル情報機関高官の言葉を思い出します。まさに今その思いでしょう。

5月12日 去年あれほど花一杯で葉の緑を隠してしまう程だったツツジ。今年は咲きはじめた！と喜んだ状態のまま、それ以上花が続かずです。20株以上の今年のツツジ、一花も咲かないままのも5、6株あります。雨が少なかったせいかな……。窓からのぞいては気にしています。

デジカメ歌人の立夏は祭のスナップ。やっと立てたか、歩けるようになった幼の後姿です。「おさなのうれしい顔を思い描いて楽しい気分を味わって下さればうれしいです」と。本当に！ニンマリと子どもたちを思い出してしまいましたよ。“ガストロップ仕舞わぬ内に夏支度今年の春は行方がしれず”“サイゴン陥落四〇年陽強き日「自由と獨裁」ツワイクを読む”“土井たか子逝き田端忍文庫はずされる戦後憲法の旗我は降ろさず”と心に沁みる二首もあります。

「正義」「良心」闘ってきた日々は眩しくまた誇りです。

友人からサウジアラビア関連など資料ありがとう。丁度欲しかった資料です。何故こんなにサウジアラビアが強硬なのか？「危機感の現れ」と思うので少

し勉強しつつ昔のサウジをとらえ返してみたいと思います。資料は貴重です。

5月13日 今日は夏物パジャマも配給されました。半袖の作業着も。でもまだ冬物の方が季節に合っています。冬物でカーディガンを脱いで丁度良い季節になりました。

新聞ではオスプレイを17年から横田基地に配備するとペンタゴンの発表を伝えています。現在沖縄普天間飛行場に24機配備されていて、本土への配備は初とのこと。海兵隊使用のオスプレイMV22は沖縄で、横田へは空軍仕様のCV22型で特殊作戦部隊用とのこと。

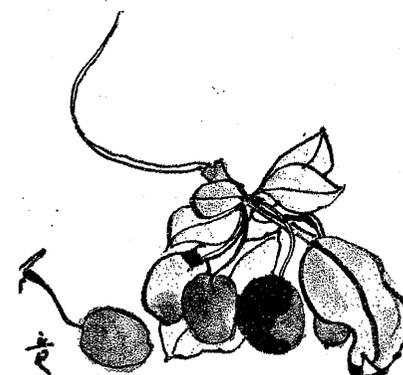
いつものようにペンタゴンは「オスプレイの配備で米軍の特殊部隊の能力が向上し、人道支援や災害救難含め日本やアジア太平洋地域での危機や不測の事態に迅速に対応できるようになる」と日本社会に受け入れられるようにとの口先の声明。日本全土が米軍の自由自在。沖縄の負担は逆に増えることになるのは必至です。

安倍政権になって日本の自衛隊は米戦略の一つの駒になったばかりか、沖縄を含む在日米軍基地は永続化するばかりです。アジア隣国との矛盾は意に介さず。

A級戦犯として収監中だった岸信介は48年11月12日の東京裁判25人の被告に有罪判決が出た翌日「日本の侵略的意図といふ偏見を以って片づけて了っている」と日記に不満をつづったのは孫も同じ思想。その記事に傍聴した作家大佛次郎は「悪かったと誰も言わなかったのが不思議なような心持がする」と記したとのこと。ほらね！今もあやまらないのは一貫して戦争遂行者たちの考えを安倍首相が志としているからです。

5月14日 今日から窓を開けたままでも寒くない。この房は、窓の幅が狭い上に窓の位置が高いので、開放感はありません。それに30センチだけ開いている窓は鉄格子に虫除けの網が内側に張ってあるので、見えにくいのです。それでも背伸びして、真下をのぞくと、こでまりのような白い花！ピラカンサの花かしら。野げし、春シオンもきれいです。

今日は木曜日、グラウンド運動日でもあります。建物の外に出て、真っ先に見ると、楽しみのすずらん、あやめはもう終わっていました。それでもクローバーの香りが風に乗ってきて、芝生のあるグラウンドの真ん中には、クローバーの花から花へと蜜蜂



がぶんぶん飛び回っています。都心は30度で初夏の真夏日となった日だけあって、こちらも真青な空。

見上げながら、この空に連なるパレスチナに連帯！今日はイスラエルが一方的に「建国宣言」した日。それまでも殺され追放されたパレスチナ人は祖国を占領され、さらに殺され続けることになるのです。5月14日のこの「イスラエル建国」は、15日、パレスチナ人の知るところとなり、民族大破局の日、ナクバの日として刻まれています。この頃パレスチナニュースが日本の新聞には載りませんが、例年なら、14、15日には、ナクバの関連して特集記事が組まれていたのに。

中東の現在に至る混迷の根本は、米欧政府によって「ユダヤ人虐殺」の責任をパレスチナに押し付けてきた「イスラエル建国」の植民地政策にあります。それが、アラブ対イスラエルの対立を作り出しパレスチナ・アラブ解放と建国の闘いとしてずっと闘われ、解放されずにいます。なぜなら、米欧政権が公正な立場に立たず、イスラエルの国際法無視を許し、占領と民族浄化が今も続いているからです。この「アラブ対イスラエル」の対立構図を変えようと実体をそのままにして、米・イスラエルは冷戦後から「アラブ対イスラエル対立ではない。和平を望む者と望まぬ者との対立だ」とキャンペーンを張りました。なぜそれも失敗したのでしょうか。なぜなら、「包括的和平」を求めてアラブ側は望んだのですが、リカード政権ジャミール首相が東エルサレムの併合、ゴラン高原併合を結局変更、返還できなかったからです。（当時この件で「ブッシュ父政権らがイスラエルに圧力をかけたとして、ブッシュは二期目にクリントンに負けた」と言われていました。）この構図を変える企みの最たるものが、今に至る宗派対立への焦点化であり、これはブッシュ子のイラク侵略戦争で、決定的に広がって、現在に至っています。この「宗

派戦争」は問題の基本を覆い隠し、イスラエルに有利に作用しています。「パレスチナ問題」すなわちイスラエル占領が汎アラブ規模で焦点化されない流れに転換させて現在の混迷が続いています。今こそ宗派戦争を超える中東の根本問題、イスラエルのパレスチナ・アラブ占領地域からの撤退による包括的な中東和平にこそパラダイム転換する時でしょう。

5月15日 ナクバの日として、中東の各地で、パレスチナ西岸やガザばかりでなく、各地の難民キャンプで、ナクバから67年目の闘いの誓いを新たにしていることでしょう。

18万人の居たヤルムークの街。すでに1.8万人と言われていた内戦下のキャンプの街は、IS制圧下にあるとのニュース。その中でも、「ナクバ」を思い今の惨事に重ね、パレスチナの子どもたちを思い……。すべての家族が苦難に立ち向かっていることでしょう。

根本問題の解決なしには、シリア内戦も公正に解決されまいでしょう。アルカイダ系イスラ戦線は、イスラエルに占領されたゴラン高原地域からリーダーも生まれていて、イスラエルと協調して、反アサド戦争をやっているようです。このイスラ戦線に対して、サウジとカタール、トルコが支援し、「テロ組織」指定解除に向けて改名を勧めたり、工作したりしているとの記事もあります。加えて、サウジは「アラブ合同軍」を地上戦にと構想し、イエメン空爆の次はシリアへと夢想している様子。アサド包囲は強まっています。

かつて、「イスラエル包囲」を9・11まで主導したのは、アサド政権(父)でした。2000年には、レバノン南部からイスラエルは敗走し、シリア・ヒズブッラー軍が強固に対峙していたのですが、2003年イラク侵略戦争以降は反イスラエル勢力(イ

ラク・シリアのバース党政権、イランシーア派政権とシーア派勢力)が、逆に包囲されている現局面です。

パレスチナ、イスラエル問題抜きに中東の平和は訪れないのを改めて実感するナクバの今日です。

CKさん「草引きの達成感や爪を切る」秀逸な句ですね。「草引き」ですか? 前に友人から「草抜き」とあり。我が家は「草刈り」だったな……と思い出します。地方によって、表現が違いますね。

そういえば、私も昨日短歌「優秀」で、ノートをもらいました。凡作でしたが、「花吹雪踊れば浮かぶ入学式母に手引かれし学者の道」だったか。昨年は特選。特選が一番で、優秀は二番です。でも商品のノートは同じ。(50頁のノートが30頁に)

Kさんステキな庭ですね! 玄関近くでしょうか。愛犬も14歳ですか?! 悠々堂々としてますね。パンジーや何の花でしょう。すごーくきれいな花々。友人を亡くして、悲しみを受入れてゆくしかないですねと、前向きなKさん。五月のクローバーの香りを送ります!

宮崎先生、「五・一五」の句、そう5・15ですね。「狼煙なり昭和維新の五・一五」など、当時を問う句。今日は沖縄の「本土復帰」から43年。「復帰」でなく「独立」を唱えてた人も居ました。本土側の米軍基地反対闘争が当時から沖縄を含む闘いとしてはできなかった弱さが、今も沖縄を犠牲にしたままです。「戦争法制」が進む中、益々国家主義の安倍政権の抑圧は深まっています。でも、沖縄の人々の意志がある限り、米日政府は計画を変更せざるを得ないでしょう。世界は変わり続けていくのですから、そのエネルギーに共振しながら、沖縄の闘いも! と祈らずにいられません。

5月18日 今日は橋下市長破れて、政界引退の記事。住民の側からの望みが見えない市長の敗北です。これで、安倍をつまんで改憲する流れは流れはほんの少し変わるきっかけになればと思います。

エジプトではムルシー前大統領に死刑判決。また、IS関連の攻防激化が伝えられています。米特殊部隊によるIS幹部殺害など。どれほどの住民が殺され、また戦場化で家を追われているのか……。

CKさんウトロの闘い(不当な在日朝鮮人居住地の立ち退き判決に対して、日本人や在日の民間基金と韓国からの基金で土地を買取った。そして、宇

治市がそこに公共住宅を建てることになり、秋からの工事の住民説明会に行ったという話)前に聞いたけれど、もう工事にまで進んだんですね!“夏来るウトロ広場も三十年”

今日は冬物のカーディガンや靴下が夏物に変わり、毛布も一枚返却して、着々の夏仕度です。みんな元気でしょか。

5月19日 明け方の雨が上がって爽快な朝。午後はコーラスで、小学校時代に歌った「若葉」と「緑のそよ風」を歌いました。「若葉」は、昭和17年の文部省唱歌だそうです。ソプラノの先生は、戦時中の子供時代を語り「戦争は絶対許してはだめ!」と言いながら、この「若葉」の歌が明るく気持ちを転じてくれた、当時の救いのようないい歌だったと語りました。「知っている人は?」と先生が聞くと、私一人。おかげで歌う様に言われて、小学校以来、こんな歌があったことも忘れ、歌ったこともなかったのに、歌は不思議。歌い出したらスラスラと! 「鮮やかな緑よ、明るい緑よ、鳥居を包みわら屋を隠し香る香る若葉が香る~♪♪」でない声も出て、楽しい30分でした。

午後、資料やお便り、本もありがとう。水谷さん「革共同政治局の敗北—あるいは中核派の崩壊1975-2014」(水谷保孝・岸宏一著)の本ありがとうございます。446pの厚い本、中核派のことはまったく知らない私。ゆっくり読んでいきたいと思えます。

5月20日 夕方、Tさんのお便り、感謝。Tさんは3月の検査結果も良かったし、のびのびと過ごしておられる様子にホッと励まされます。「ウトロの新しい町づくり」の歴史的な闘い、エピソードをまじえて伝えて下さって、ウルウルしてしまういい話です。戦前からそこに居た朝鮮の人たちの立ち退き命令に、法的にもまた、人間の尊厳をかけても闘っていった話。韓国政府・市民も日本の市民たちも共に連帯して土地を買取り、行政に直接住宅工事を予算化させた闘いです。Tさんのお連れ合いのAさんが、在日の朝鮮・韓国籍の住民たちと共に、日本人の側のリーダーとしてこの活動を築いてこられたのは、他の方々からも聞いて知っています。それに「原発再稼働阻止」の現場のチラシやパンフ、いろいろ学習資料ありがとうございます。

前田弁護士、故郷宮崎に弁護士事務所移されたと、

御挨拶の便り。前田先生が宮崎なら、何かの折、Tさんたちも心強いでしょう。

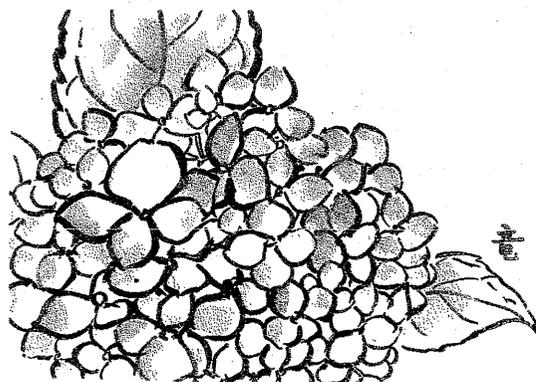
5月21日 夜中は雷雨激しくて目を覚ますと、稲光がサーチライトのよう。でも起床時は快晴です。10時半、運動場に出ると黄蝶がひらひら。野げし、アザミ、クローバー、庭石菖! 良い季節! 何度も深呼吸しながら30分。クローバーの香りの良い5月の風です。

午後「オリーブの樹」129号受け取りました。今号は5・30もあって、パレスチナのことを書いたのと、「情況」5月号に載った一文も載っています。歌や絵もこれを! とリクエストしたりしましたが、全部採用して、きちんと129号に納めて下さって編集室に感謝します。表紙の一首と、ふさわしい麦穂の絵もとっても気に入りました! 日誌も整理されているし寄稿もいいですね。

「高浜原発運転差止めの仮処分決定に拍手をおくる」の文、現実・現場の様子、友人たちの姿を伝えてくれています。一つの判決の勝利の大きさを、みなかみしめておられる様子、これからの活動への力になるのがわかります。連帯!

もう一つの文は、民主党のことを含め、5月3日の憲法集会の様子。私も新聞で、3万人集まったと載っていたので、どんなだったかな? と思っていたところでした。「幻滅の民主党」こちら現場の様子がとても鮮やかに伝わります。民主党の「やっぱりな……」護憲に加わっている長妻さんの評価と失望。本当に民主党の「腰が座っていない」姿の象徴みたいに……。それでも「日本会議」の草の根戦術を超える活動を、この「5・3憲法集会—戦争・原発・貧困・差別を許さない」の3万人の人々に! と願いたい託したい思いです。

また、「花と闘い」は、私が40歳前後の頃、パールベックの軍事キャンプで、竹中さんと話をしてきた時代のことです。竹中さんが連帯の印に、画家である父上、竹中栄太郎さんから、扇面を頂いたことがありました。私自身も記憶の彼方に沈んでいたのですが、この「花と闘い」のコピーを頂いて、つい最近のことのように、竹中さんと話したことが浮かんできました。「とにかく、右だ左だとあれこれ言い争ったり、『内ゲバ』の消耗戦でなく、自民党支配を一度でも合法的に覆さない!」と語り合ったものです。「是非見てほしい」と、実に見事な刺青、背から腰まで見せてくれた竹中さんを思い出します。



5月22日 新聞では、ISがパルミラ制圧。アサド政権が弱っているせいでしょう。アサド政権打倒で、自由シリア軍が西側が後押しする勢力と、トルコ、カタール、サウジらも支援する、アルカイダ系のヌスラ戦線と部族武装勢力が南部から攻めて、ヤルムーク・パレスチナ難民キャンプもISに制圧されている状況です。首都とレバノンを結ぶ街道、西部ラタキアなど、海岸地帯を防衛するのも精一杯でそれ以上は厳しいでしょう。劇的な転換か?……アサド政権の窮地はISとヌスラ戦線の拡大を意味し、今以上に危険です。住民への殺戮が更に増大するからです。パルミラの光景を思い返しています。パルミラのアゴラに立ち、地平線の東から朝日が射しはじめると、高専の加減で数千数万人の人々の群れが行き交っているような幻覚を見ます。生活している昔の人々が、立ち上がってくるようなのです。円形劇場に座って静かに風が吹き抜けると、劇の舞台は人であふれるような錯覚……。アテネのアクロポリスよりも巨大で、砂漠に忽然と現れるパルミラ。パーシムとサラハも、リッダ闘争前に、一泊旅行でパルミラに行きました。パルミラの岩山のでっぺんの城は、崩れる危険があると立ち入り禁止でしたが、パーシムたちはそこも登らせてもらった!と、とっても感動していました。そこから、はるか無辺の砂漠を見はるかし、パルミラのオアシスだけが緑をたたえている。少ない草をさがして羊たちの群れ。ああ、こんなところでベドウィン(遊牧民)のように生きていけたらいいなあ……と話をしていたのを思い出します。

パルミラの住民たち、殺されているのでしょうか。大多数の村人は「恭順を示してやりすごし、時を待つ」19世紀以前の知恵で生きていくと思うのですが……。でもISは「背教者!」と見せしめに殺害するし、遺跡破壊もISの権威を高めるプロパガンダで危険です。厳しい5月です。

5月24日 「NPT会議が決裂」各軍縮文書の採決に失敗の記事。米・英が中東非核構想が盛り込まれていることに、イスラエル防衛のため反発。あたかも国連安保理のいつもの「拒否権行使」のように「全会一致」を悪用した介入。「イスラエルはNPT会議に加わってもいないのに、米国がNPT会議の全会一致を妨害した」圧倒的な国々からの批判は当然です。イランの核開発を抑え込む同じ論理を、イスラエルの核兵器に対しては使わない、こういう中

東におけるダブルスタンダードは、中東の混迷の根本的な問題です。米・英の昔からの振る舞い、植民地主義は今もこのように続いています。憤りが湧きます。

古い新聞で、「海恋し二十一年見ていない 泳いでいない釣りにしていない」郷隼人の一首を見て、ふと西浦クンが浮かびます。海が好きだった釣りが好きだった彼。「海釣りの醍醐味伝える文絶えしそだもう君はいないんだから」と零れました。

5月26日 サツキのピンク色がずいぶん咲きました。Yさん、ありがとうございます。資料も受け取りました。そちらも多忙なところ、煩わせてすみません。R子さん、麦穂の絵、カラーのお便りありがとうございます。すごく気に入っています。花屋を、描くために探して下さったなんて……。本当にありがとうございます。もうすぐ紫陽花の季節ですね。尚さんの命日がまた訪れます。そうだ……今年七回忌。早くもそんな年月が去って行ったのですね。生真面目な、白いYシャツのあの時のままの大学の先輩が浮かびます。あと一か月、6月25日ですね……。ご家族と良い時を!

5月27日 M子さんのお便り、5月14日に西浦クンの納骨が行われたとのこと。6月末に、彼の好んだ海に散骨もされるとのこと。元気そうなお便りうれしいです。金魚の風邪も、一匹が死んだけれど残り三四、やたら元気。永く生きるらしいですね。裏の桃畑の袋掛けも終わったとのこと。

「私の子供のころは新聞紙で袋を～」とあり、「そうそう!うちも!」と思い出しています。世田谷時代は、広い庭に大きな白桃がたくさん実る大木があって、うちも新聞紙の袋で父が一つ一つ袋掛けしていました。子供心に袋掛けが終わると、大好きな木登りはやめて、隣の大木の無花果に登っていました。もうそんな季節なのですね。それに梅も6月には取り頃なのでしょう。庭を眺めていると、何だか彼が居る気分になるのでしょうか。愛しいひとの「死」は生きつづけていますものね。元気でいて下さい。

5月28日 グラウンドに出ると汗びっしょりの季節です。芝に座って柔軟をやるのもちょうどいい季節。明日は丸さんの命日です。そして5・30。

今日は少しどんよりした空を見上げながら、先に逝った仲間たちを思い返しています。そしてまた、

岡本さんもベイルートで例年の5・30のパーシムたちへの墓参り、パレスチナの人々と共に行くでしょう。この季節の中東、草原は花ざかり、ベイルートはあちこちからジャスミンの香りが風に乗り、路地に入るとブーゲンビリアの緋の花が咲いて、いい季節。そんな景色と辛いヤルムークのパレスチナの人々、また、レバノンに避難してきた百万をこえるシリア・パレスチナの人々、戦場IS支配下の人々、祈る思いになってしまいます。「平和も解放も闘うことによってしか勝ちとれない」闘うこと、それをパレスチナ・日本で実現していこう!と心に思う5月28日です。(生きていけば7年後の5月28日が出所日ですが……)がんばろう!連帯!

5月29日 今日は丸さんの命日。薄曇りの朝です。起床後、黙祷。丸さんの亡くなったあの日はとても寒く夕方には雨で震えるほどでした。丸岡さんの遺体を引き取りにきた人々は寒さの雨の中、濡れながら悲しみを耐えてじっと待っていたのを思い出しています。

今日は暖かで穏やかです。「フォーリンアフェアーズ」など資料頂きました。感謝。「フォーリンアフェアーズ」は毎号米政府の外交政策の当事者や関連の米外交評議会メンバーの意見が載るので、米政権の外交問題や次の展開を学ぶことができます。

中東政策今号では「敵はイランかISか」と討論しています。対ISで米政府が空爆すればするほどイランの利益になっているジレンマ。アサド打倒含めイラン敵視をもっとやるべしという意向の論理が今号は載っています。トルコ・サウジ接近によるアサド打倒の動きなども。また対ISでは空爆をすでに3000回以上、イラク政府軍の敗退にシーア派民兵を再動員しての地上戦闘が続いています。がISは米やシーア派から打撃を受ければ受けるほど「英雄的に十字軍と戦う」と思われ益々ISに有利に展開するのが、まだ戦略的に考察されていないのでしょうか。住民たちは空爆とIS支配下、どう生きのびているのでしょうか。来たらやり過ぎ、反撃しないけど決して屈服せず、是々非々でいつものように彼らは生き続けているのでしょうか。

デジカメ歌人より「写真は冬羽から夏羽へと変わったコサギが早苗田の青に涼しげに佇んでいます。暑い時期わずかの涼風を感じて頂ければ幸いです。」涼しげでトウシューズで踊るプリマバレリーナの姿のようです。美しい!「溪谷の宿栗の花匂う湿る開



欲望を照らす蛍がひとつ飛ぶ”季節を伝える一首。そんな溪谷へ行ってみたい!

CKさん「大阪の住民投票勝利をみんなで『よかった』『よかった!』と喜びを分かち合いました。こうしたここに集る人たちの戦う力がきつと維新の野望を挫く力になったに違いないと思いました。」橋下の自滅というよりやっぱり住民たちの意志の勝利だと実感しているのですね、こんな想いも感じつつ、「引退」にも喜び薄し放射能汚染のごとき悪政残り」と。

宮崎先生本ありがとうございます。楽しんで読んでいます。「水ぬるむ」や「浜辺」やたくさん詠んでいますね。絵がいつも何ともいえず貴重です。プロ並みの絵ですもの。「潮引きて波打ち際に蟹二匹」松林の彼方にかすむ朧月」の浜辺の絵がいいですね。句にぴったり!「水ぬるむ」の題の水田もみごとです。「谷合に涼を湛えて泉なす」友人たちの田植えももうそろそろ、蛍の飛びかうのをずいぶん見えています。

ベカーの軍キャンプには幼虫のときに蛍のように光り、成虫になるとゲンジボタルのようですが、光らない蛍がいました。夜の歩哨の時には漆黒の闇に地面が星粒のように光っていました。これから蛍狩りの季節ですね。

5月30日 あの72年の5月30日のベイルートのようにさわやかに晴れた青空です。季節も5月にしては暑い日本、ちょうどベイルートの季節のよう。

ジャスミンの香りが風に乘って、賑やかにアルハダフ事務所で仕事をして昼食に階下のレストランへ。PFLP専用みたいな小さいレストラン。アルハダフやPFLPの仲間はそこでトマトスープ(羊肉とオクラやビーンズの入った)をアラブ風炒めご飯にかけて、パンときゅうりか蕪のピクルスで昼食をと

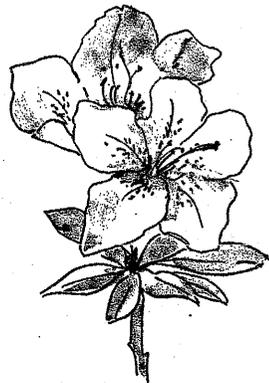
ります。いつものように何人かとテーブルを囲んでポスターがどうか、インタビューがどうか話していました。

ガッサン・カナファーニが来て隣に座り「今日でしばらくマリアンは旅行に出るのでアルハダフの仕事は休業ですから」と言いながらみんなでジュースで乾杯したりしました。ガッサンが小声で「夜までに荷物をまとめておいて。保安局の人が行くから」と言いました。ああ、パーシムたちの戦いが始まるのだな！と何も言わずに分かりました。あの日「必ずパーシムたちは計画通りにやるはずだ、失敗することはない」と確信していました。どこで何を具体的に知らなくても。最初のニュースを聞いたのは現地時間の5月31日0時でした。あの日のことは昨日のこのように鮮やかに記憶に刻まれています。

青空を見上げてパーシムにサラーハにそしてアハマド岡本に感謝と哀悼と連帯を伝えました。そして私自身の今の心境、中東のこと日本のこと語りかけながら気づくと、黄蝶が二匹半月の上を遊んでいます。若いままのパーシム、サハラ。「幸せな生だった」と語りありがとうと感謝の言葉を遺して決死戦へと向かいました。

ローマからの彼のその手紙を受けとったのはリッダ闘争から一週間位後のことで、パーシムが甦ったような驚きと喜びと哀しみでした。その飛行機に乗る前に投函するパーシムの精神を思い返しています。彼の精神の強靱さは深いヒューマンイズムだと。飾る花はここには無いけれど、ニザール丸岡も共にあるペイルートの墓の写真に敬礼しました。

5月31日 5月尽。本当は日本時間では5月31日明け方がリッダ闘争の時間です。5・30までにあれとこれをやり遂げようと自分なりに計画していたこと、できた！と一人で達成感です。ほんの身の



回りの小さいことですが。このごろ日本は火山列島だと改めて思う噴火、地震があいついでいます。こんな火山列島に原発施設など、前提から間違っています。「原子力平和利用」などとアメリカや正力の口車にのせられて……。米国自身の基準ではもし日本の状態、条件だったら米国で許可しないでしょうに。

6月1日 “風薫るハングル喋った二つ三つ” CKさんのさっそうとした姿がうかびます。火曜行動ですね。「泉水国賠訴訟」も5月末にあったのですね。「フクシマ原発事故賠償関西訴訟」も。マイノリティーの置かれている厳しい現実を見続けているとCKさん「この国の周辺部分に矛盾がしわ寄せされ、それがいくら訴えても無視されている現実です」と。

宮崎先生送って下さった小説また続きですね。いつも感謝！川柳のような一句！“雨傘をさして歩けば雨は止み”先生の大好きな雨蛙の季節、もう楽しんでますか?! どうぞ健康で！

6月2日 今日は涼しい。久しぶりに親類の面会。遠くからの面会に感謝。親類も健やかに過ごしている様子。一番暇なのはあなた、しっかり休養しつつできることはやるようにと励まされてしまいました。面会に行く時水蓮が小さな池にきれいに咲いているのを窓越しに見ました。紫陽花は花芽もつけていません。咲かないのかな……。面会はずも心はずみです。感謝。

新聞ではアサド政権に包囲網。サウジ、トルコ、カタール中心に「シリア自由軍」イスラーム勢力「ヌスラ戦線」などをまとめて総攻撃の様子。これはレバノンにも内戦が同様に及びそうです。サウジの前アブドゥッラー王は対イスラエル戦略をもって和平案提出したり、イランとも対立を回避した傾向がありました。今のサルマーン国王が皇太子、国防相になって2012年あたりから好戦的。35歳の息子を国防相につけ第二皇太子に任命し、好戦的な宗派戦争を煽っています。神権国家サウジ、イランが反体制派の鍵を握るところに中東の混迷がよく表れています。

6月3日 大雨です。そのため運動は室内。(と言っても狭い房でラジオ体操と柔軟体操。体操の音楽は東狗と同じ。全国共通でしょう。) 雨が上がった涼しい風もまた気持ち良いです。国会での様々な安保法

制論議。何か政権側の予定調和にはまっているようでスッキリしません。今日のCKさんの句がいい。「戦争が背筋伸ばして衣替え」そうはさせじ！

今週は「土曜会」です。みんなにあれこれいろいろありがとう！体調みんなOKですか？元気で！

6月4日 今日はいつもと違って、午後に運動場に行きました。昨日の雨で洗われたような晴れが清々しい。蝶も舞い、もう帽子がほしい日射でした。さつきも盛りを過ぎようとしています。

Yさん資料ありがとう。この間の首都圏の集会や「止めよう戦争法案」の国会前木曜連続行動など、本当に深刻な戦争法案、憲法違反の安倍政権になんとかストップかけたい！という思いが伝わってきます。私も同じ思いながら何もできない……。！

また、5・30の集いあったのですね。「5・30リッダ闘争45周年記念懇談会」“今、日本の現代の矛盾は、どれも国際的状況と直接に連動している攻撃ととらえ、国際的な民衆の闘いと呼応するように闘いを！今ふたたび国際主義の闘いの発展をめざそう”と「元ムーブメント連帯」の仲間と呼ばかれています。

益々世界の運動と連動し、原発輸出には、トルコや現地の人々と、そして、ギリシャの闘いと、さらに今秋には「ポデモス」も合法的に選挙で躍進しそうな人民運動。連帯は力になるでしょう。

レーニン時代のインターナショナルの不可分の労働者階級の一つの力には程遠い今の現実ですが、欧州はギリシャのチプラスが1月30日のマドリッドでの「ポデモス」大集会に参加して、党首同士ハイタッチして共闘を語っています。

「ポデモス」は「私たちにできる」という意味。党首は、パブロ・イグレシアス・トゥリオン。36歳のマドリッド・コンプルチセ大学の政治学教授。「ラテン米と結びついたポピュリスト運動」で、「ポデモス」NO.2のカルロス・モネデロベネズエラチャベスのアドバイザーを務めていたとのこと。

「緊急財政反対」の立場を掲げ、経済民主化には政治的変革が必要だと登場しました。去年の欧州議会選挙で、スペイン総選挙で、ギリシャみたいに勝ちそうとか。「主要な経済セクターの国有化、生活に必要な賃金の政府保証、利益を上げている企業は労働者解雇禁止、公的債務支払いに関する市民の監視の拡大、週35時間労働」などをあげているらしい。

日本も真似からでもいいから状況をカラリと展開

するような若手リーダーがいてもいいですね。安倍政権が隣国と対立ばかりするなら、逆に交流ハイタッチで状況も変えたいし、沖縄翁長知事の米国への働きかけの闘いもまた共通するものを感じます。獄中で働かずに(気軽に)夢を描くしかない条件の私は、現実の大変さの数々で「どうでもいいこと」に苦勞せざるをえない仲間の友人たちに連帯！しかいえませんが……。元気で何とか生活しつつ、がんばって欲しいです。

6月5日 今日は、コーラス。「白いブランコ」と、「おお牧場は緑」を習いつつ歌いました。「白いブランコ」は、すでに私がアラブに居た頃流行したようです。一ヶ月一回でも大声で歌うのは気持ちよいです。

Tさん久しぶりです。お便りありがとう。地域でしっかりと生活も活動も有意義にお過ごしの様子。「ちょうど安保法制論議が伝えられています。何か急に出てきた感じのする戦争法案です。現在進行している事態は、3年前『アーミテージ・ナイ報告書』に示されていた内容どおりに進んでいることに気付かされました。実に注意深く用意周到に進められています。フクシマを経てもなお、原発再稼働にカジを切ったのも、それを読み返すとよく分かります」とのこと。同感です。前に、「フォーリンアフェアーズ」にも「アーミテージ・ナイレポート」出ていました。

今日の新聞では、安保法制について4日の憲法審査会で、自民、民主、維新の党の推薦した3人の学者が、3人共「憲法違反」と見解を示しました。これでやっと、まともに国会が論戦の場所になりそうです。憲法違反を去年から勝手に変えた「集団的自衛権」の閣議にはじまり、黒を白と厚顔に進めてきたことが、やっと「違憲」と、原点を問うことになりそうですね。

6月7日 週末の日曜日。水谷さんの中核派総括の本読み終わりました。いろいろ考えさせられます。(読んだ本に収録)

6月10日 今日診察で、6月3日の血糖検査の結果を教えてもらいました。腫瘍マーカーは正常範囲内でした。体調も良好、小さな直腸粘膜下腫瘍は気になるけれど。

デジカメ歌人、芒種の便りありがとう。「叡山の裾

戒律厳しい堂跡に定家の爪塚在らし尋ねん”三井寺の少女もステキですね！もう田植え？新緑、蛍も梅雨入りしました。

あ、6月8日に転房しました。窓大きくて風も入って気持ち良い房です。

6月11日 これまでの小さな窓の房と違って、3月まで使っていた窓の大きい房に戻ったので、夜はカーテンを開けたままにしています。夜中から明け方、下弦の月も見えます。暁暗が少しづつ陽に溶けていく夜明けは気持ちがいいです。

窓辺に立って、そうか、今日はドクトーラが亡くなった日、一周忌だなあ……と思いつつ空を見上げて、哀悼の思いで合掌。パレスチナの人々の為にと、レバノン南部のサイダのアイネ・ヘルウェパレスチナキャンプやラシャディーヤキャンプ、シリアのヤルムークキャンプ、共に語り合った数々が浮かびます。豪快な笑い声、よく通る美しい歌声、キャンプの人々といつも同じように質素を旨としていたドクトーラ・スワード。「再び戻ってくる」とキャンプの年寄りや子供たちに約束していたのに、パスポート発給を拒まれて果たせませんでした。本人も、もう一度来たかったはずです。迷惑をこれ以上かけては……と遠慮して、私も手紙を出さずに永別してしまったこと、今も惜しく悔やまれます。いろんなことあやまりつつ語りかけました。I子さんもきっと信原さんのことを思い出していることでしょう。

今日、グラウンド運動で建物を出ると、クチナシの香り！目の前の一本のクチナシに、たくさん純白の花が盛り、夏の花が咲いていました。午後は、国府弘子さんの「ジャズライブ」。新しいCD「ピアノ一丁」からのオリジナル新曲やピアノセラピーから静かな曲（本人の癌体験から作曲に至った曲）何度聴いても心が満たされるような「ノスタルジア」。親しみとリラックス込めて、ピアノで「フーテンの寅さん」の曲から登場して、話術も演奏も素晴らしい。途中リクエスト「カーペンターズとビートルズどちらでも」といわれて聴衆から「イエスタディ」や「青春の輝き」私も「ヘイジュード」をリクエストして楽しみました。後半はヴァイオリニストの早稲田桜子さんも一緒にあがり、アンコールで「スターランド」。震災を経て作曲された、地球を慈しみ平等をねがうといういい曲。私はこの曲が一番好きです。あつという間にライブは終わり、みんな大満足です。

6月12日 梅雨らしい空模様です。金網に頭をつけて真下を眺くと、白い鉄砲百合が二輪。場違いのように楓若葉の脇に咲いているのを見つけました。この白百合は、ドクトーラに捧げたい……。

6月15日 あゝ6・15の日ですね。あの60年は、雨が降っていた日。今日は快晴、真夏日です。今日から入浴が、月・水・金の週3回の夏暦となりました。朝、I子さん白いホテルブログのステキなハガキありがとうございます。「今日は信原さんの命日でした。通夜の帰りの記憶が、卵の花の香りと共に蘇りました」とあります。「あゝ、今日とはとってもいい日でした」とのこと、私も嬉しいです。

Kさん「庭の山あじさい雨に濡れて美しいです」と、写真送ってくださいました。よく撮れていますね。陽の光、花の表情一つずつ。あゝこんな風に近くであじさい見てみたい！彼の故郷や京都へ行かれたのでしたら、懐かしい人々にも会えましたか？「ニュースを見ていると本当に怒りが込みあがってきます」同感。日本語を愚弄した小手先の法案名にも、まったく官僚作文の事態想定にも、劣化している日本の支配層にあきれますね。何もできないけれど、批判はしっかり心がけたいです。再会まで元気で！

そうそう、昨日の「歌壇」に直木孝次郎先生の歌“死ねといふ訓話を聞きし夜を思ふ七十二年前の夜なりき”明大時代授業を受けました。著名な先生です。まだまだお元気で投稿され、時々見かけます。5月にもみかけて、こんな歌が舞いました。“半世紀前の恩師の詠む歌を「歌壇」にみつけ励ましとする”

6月16日 昨日は新聞休刊日でしたが、今日届いた新聞に「国会前で路上抗議」と、「安保関連法案」に反対する市民団体が、連携して15日から国会前の路上で抗議の座り込みをはじめたとの記事！異議なし！と連帯したい心境です。14日の集会には2万5千人が集ったとのこと。日本全体から見れば、まだ小さい力かもしれないけれど、多様な形で安倍内閣の憲法違反の法案の廃案に持ち込みたいものです。反対意見無視のやり方は、欧州の政治討論議会では考えられないやり口。市民団体、憲法審査会の声など無視とは。

6月17日 窓の下の野の花、夏草が爆音と共に草刈り機で蹴散らされてしまいました。房には、なつ

かしい夏草の匂いがたちこめています。今日か明日、中東地域はラマダン断食月に入りますね。

M子さん、もう朝顔が開きましたか。日毎にその花の数が増えているとのこと、目に浮かびます。「昨日は猫がやたらと長い蛇を引きずって入り、部屋で放したので大騒動をいたしました。棒で追い立てて玄関から出てもらいましたが、蛇も私もくたくた。元気なのは猫だけ」とのこと。蛇もくたくた、M子もくたくたの様子に思わずにんまり。失礼！彼が居れば、彼がすぐ引きうけてくれるのにな。そうですね、彼が6月に入院したのを思い返しています。“生きて再び会えない君が恋しくて思い出の海に静かに潜る”M子さんの心を詠んでみました。短歌やりませんか？永田和弘と河野裕子の最期の歌集はすばらしいですよ。(河野さんが乳がんで死ぬのですが、永田さんは朝日歌壇の選者)最期の彼女の歌は、“手をのべてあなたとあなたに触れたきに息が足りないこの世の息が”この歌をみると、M子さんと彼を思います。お便り資料ありがとうございます。

6月18日 このごろは曇か雨か、起床時から梅雨空です。今日はグラウンド体操だったので、梅雨冷えがかえて涼しくて良かったです。くちなしが真盛り、ねじ花もまだ咲いています。

6月19日 梅雨らしい週末。運動も雨天中止の金曜日です。

資料いろいろ頂き、週末読みごたえあります。「アジア新時代と日本」も届きました。論文の中にTさんの文も。いいですね。また、「磯江通信」も、船本さんを復権させるような企画。闘いの怒りを彼の姿から現在形に継ぎたいですね。

中東資料昨日受け取った「イスラーム国の脅威とイラク」(岩波書店、数人の著者)とてもいい本です。もっと早く読みたかった本です。「イスラーム国」の背景などよくわかり、また、同感です。データ資料もしっかりしていて、すぐ2日で読んでしまいました。また、週末ゆっくり読み返したい本です。「フォーリンアフェアーズ」6月号も。

中東のラマダン、シリア・イラク・パレスチナ・レバノンの人々はどんなラマダンを迎えているでしょうか。シリアはサウジ新王と、トルコ、エルドアン大統領が一致し、ヌスラ戦線含めて後押しというより、煽動して内戦は厳しい状況では……。サウジらの推す宗派主義勢力がシリア権力をとる方がアサ



ド権威主義政権よりも危険が増大するでしょう。「シリア」は宗派戦争化した現局面の要、分水嶺の位置にあります。ラマダンの時だけでも戦闘が休みになると住民たちはどれだけ救われるでしょう。

6月21日 6月20日日本列島各地で、「戦争法案」に反対する女性たちの行動があったとのこと伝えてあります。赤い「怒り」を表す服やスカーフ、国会ヒューマンチェーンに約1万5千人が集まり、何重にも国会を囲んだようです。大阪、名古屋、長崎、北海道。札幌では5千500人参加との記事。きつともっと各地で統一行動が行われたでしょう。“列島に繰り出すおみな六・二〇紅蓮の憤怒ヒューマンチェーン”新聞では「ホルムズ海峡の機雷除去」にこだわる「時代遅れ」の主観的願望の安倍法案説明。95年の「ナイレポート」にはじまり2012年の「アーミテージ・ナイレポート」の内容に忠実な非現実的な想定。朝日記者がホルムズ海峡に取材した記事、現地の声によると、第一に「イランの原油100%が通る海峡を封鎖すれば損害を受けるのはイラン自身で、想定自体が非現実的」とのこと。そえは当然です。米やサウジら湾岸諸国のイランへの制裁海上封鎖の動きに対して「警告的」発言があちこちで聞かれたにすぎない話だったのですから。第二にすでにサウジはホルムズ海峡を通らずに紅海にぬけるパイプラインを敷設し、アブダビも2012年にオマーンに面した東端のフジャイラ港まで370kmのパイプラインを敷設して、両国ともホルムズ海峡を通らないでもいい準備が出来ているとの記事。首相の国会ヤジの軽薄さ同様の「危険」な戦争観の「国際平和支援法案」。国民の命の責任も感じられない国家主義思考です。

6月22日 月曜日は新聞の「歌壇」が楽しみです。多くの「戦争法案」への批判の歌が詠まれています。“質疑者も首相も原稿読んでいてまもなく行う強行採決”

“質問にろくな答えをしない人早く質問しろよとやる”

“あの時もてがらのちらつく人がいて戦争ごっこは国民不在”

“若者よ「めっちゃやばい」と今叫べ安保関連法案審議”

本当に今正念場ながら国民が観客に描かれている悔しさ、しかし何とかなしたい気持ちが歌に込められています。

私も一つ“憲法も議論も蹴散らして「私が総理大臣ですから」と”宮崎先生のアジサイの歌も絵もステキです。“紫の薬玉揺らす初夏の雨”

さきほど姉の面会があつて面会室に行ったのですが毎年みごとに咲くアジサイ、一つも咲きませんでした。花芽を冬に摘んでしまったのでしょうか。いつも枝切りはしているのですが、残念。でも中庭にみごとにバラがたくさん咲いていました。姉も元気そうであれしいです。いつもありがとう！

6月23日 今日の午後は茶道。柱に掛けた活け花はまだ色づきはじめてばかりの花。「茶道ではアジサイと言わずに」七変化“と言います。”と先生の話。先生のお点前を頂き、その後自分で点ててもう一服頂くのですが、やはりおなじ抹茶でも、先生の点てる方がまるやかでほのかに甘みがあります。でも自分で点てたのもずいぶんおいしくなってきました。そう昨日は夏至。夏至らしい快晴の八王子でした。

6月24日 デジカメ歌人「夏至」のお便り「金は金持ちに人は都会に集まり戦争は全国にばらまかれようとしています。再度自分の立つ位置を見つめ、しっかりせねばと考えています」とあります。国会会期を延長し「安保法制」が論議されればされる程「憲法違反」が益々明らかになっています。国会や国民以前にアメリカに「夏までには」と先に約束した安倍首相。頃合いを見ての強行採決をどううまくやるかしか考えていない不幸な日本です。大企業ごとに輸出産業が円安で儲かり、操作と資金を流し込んで株をつりあげて「うまくいっている経済」をプロパガンダし、政権批判にはメディアを呼びつける……。この強権の口口に対抗していく厳しい闘いの夏です。“暑さ増す動くものとして無い晩に濁りたる鳴声放ちケリ渡る”デジカメ歌人の一首を選びました。ケリは「計里」と書くチドリ科の鳩位の大きさの鳥。夏の季語なのですね、ありがとう。

四方田先生「テロルと映画」の新著受け取りました。ありがとうございます。今日は上弦の月。夕暮れに探しましたが見当たりませんでした。でも夕間暮れの白い鉄砲百合はきれい！

6月25日 10時すぎに診察。CVポートのフラッシュをしました。その後運動場へ。まだクチナシが咲いています。今日はあちこちにたくさんねじ花が咲いています。そうか、夏至の頃このねじ花は咲くのです。本や資料も届きました。「流砂」も。尚さんの命日快晴です。6月26日上原くんは「順調に入院生活中」とのお便り。週3回の透析4時間という制約と負担の大きい方法ではなく、腹膜の浸透圧で老廃物を濾過して排出する腹膜透析に換えるためのカテーテル設置などの施術も順調とのこと。まだこれから一働きの60才代後半、どうぞ元気で回復を！ハッピーバースデー！宮崎先生本ありがとうございます。楽しく読んでいます。俳句のお題は「ボケ」「石頭軟化の果てに認知症」「融通の利かぬ頭も角がとれ」全然ぼけてはおられませんよ。今年も梅の実のジュースは作りましたか？梅雨は先生の大好きな雨蛙の季節。蛙の句も作られますか？「感謝」「ペット」など次々と句を詠んでおられます。“スーパーで手に取り見れば猫の餌”川柳風に絵も楽しいお便り感謝です。

6月27日 「自民党若手の勉強会」とやらの質の悪さが社会に明らかにされた事件。「沖縄の二つの新聞社は絶対につぶさなあかん」百田発言や「マスコミを懲らしめる」などの議員発言が問題となって今日の新聞をにぎわしていますが、この首相にしてこの若手ありの憲法違反発言の面々には驚くばかりです。国民に本音があからさまに伝えられて自民党内部ではどう考えているのでしょうか。かつての自民党の戦前教育をうけた年寄ではなく「若手」の相貌にこの国がいかにか憲法をないがしろにしているか、歴史も知らないのかを見る思いです。

6月29日 昨日は「なでしこジャパン」が勝ったのですね。

自民党の劣化にあきれるのは、あわてた執行部による若手「文化芸術懇談会」代表らへの徹々たる処分ともいえない処分に対し抗議の声はあっても「百田発言」や「議員発言」さらに執行部への批判がみられないことです。地方の「保守」、右翼安倍系とち

がう自民党系も批判がないのでしょうか。

6月30日 六月尽。あっという間に「戦後70年」といわれる70年目の前半が過ぎました。私の方は3月の「ガサ入れ」に刺激されて“のほほんとしてはいけない……「現役」と思われてたんだ……！”と「衿を正して」前から依頼されていた「情況」に文を書いたりしはじめました。「情況」に依頼されても当初は獄中では第一次資料も入らないし他に書け

### ★読んだ本★

(「日誌」の中の読んだ本への記述を編集室が抜萃したものです)

「民族でも国家でもなく——北朝鮮・ヘイトスピーチ・映画——」(李鳳宇、四方田犬彦著、平凡社)読みやすく一気に読みました。とても面白い本です。今の時代の中で避けられがちなホットな問題を正面から自然な対話でどンドン切り込んでいくからです。

第一章国籍、第二章ヘイトスピーチ、第三章北朝鮮、第四章映画で構成されている著者2人の対話の本です。李さんは「月はどっちに出ている」「パッチギ!」「フラガール」などを映画プロデュースした人で、ヨーロッパ・アジアを中心に世界中の作品180本以上を配給した会社を運営している人。

第一章はこの李さんが「国籍を変えようかなと思っているんですよ、日本国籍に。なぜかという僕の場合は初めに北朝鮮から始まったんですけど…」と対話が始まります。朝鮮籍の為ソルボンヌ大学入学で再入国など手続きで一年が終わってしまったこと。初めて韓国に行こうとしたら「あんた敵国のパスポート持ってるんだから入れないよ」と言われ「同族じゃないんですか」と言ったら「いや敵国です」と厳しい条件。とりあえず朝鮮籍から韓国籍に変えたけど更に支障。不都合で仕事が成り立たない話から、国家への帰属と、自分の民族なり自分の家系への帰属、家への帰属というのは全然レベルの違う問題と語り合う。どの国籍を取ろうとそれは利便性を優先した個人の認識。それで国に対する愛国心を強要されることは困ると四方田さん。国籍とは何か、韓国人と在日韓国人の実相、さらに金石範の強烈な民族意識など赤裸々です。

第二章ヘイトスピーチでは2009年12月の在特会による京都朝鮮第一初級学校への攻撃事件から語られます。李さんの出身校であり彼はそれに対す

る人もいるから……といった具合で書いていませんでした。でも3月の「刺激」で出来ることはやろうと書いてみました。やはり情報入手のむずかしさ、資料は保持するスペースの条件ないし……。でも出来ることを少しずつ重ねていく心がけます。資料や入力で支えてくれた友人たちのおかげです。感謝！このごろ旧友、友人たちの病気になるったりするニュースが多くなりました。みんなの健康が気がかりです。どうか健康でいて下さい！

重信 房子



る正当な判決は出たけれども、本質的には子どもたちの恐怖、多分もう民族教育をする学校というのは危険な場所だから相当覚悟がないと行けない、と親に思い知らせるとい「在特会」側には効果があり、民族教育の場には大きな打撃になっていると語っています。このことから国連の人種差別撤廃委員会が「人権条約第四条(処罰立法の義務づけ)」を履行すると日本政府に迫っていても、条約締結国177カ国のうちこの第四条を制度化していないのは日本を含む6カ国だけ。そんな実情を批判し、日本は「血統主義」はやめて「属地主義」にしても一度多民族であるという社会に戻すべきですと四方田さん。読みつつ私も差別を根本的に解決しようとしたら「属地主義」を国籍として「マジョリティ日本人」が良いと思います。各々が自分の属したい民族、家族に帰属した多民族社会の日本国。実際多くの民族が住み暮らしているので不都合はないでしょう。

第三章では北朝鮮について素直に語っていて、すべて正鵠を得ていると思いつつ読みました。こういう考え、声ももっと広がるべきでは。政府や関連団

体の「拉致問題が最終的に解決したら」とはどういう解決なのか。今すぐでも国交を開いて現地日本大使館を通じて交渉し解決する方が合理的ではないのかと。国交を持たない理由は何もない。

それに「朝鮮人学校の無償化反対に反対する」と語り合う2人の対話から知ったのですが「朝鮮高校の無償化反対」といいつつ、英語でしか授業をやっていないアメリカンスクールも飯田橋にあるフランス人学校も日本政府が国民の税金から金を出しているとのこと。加えて日本は海外にある日本人学校で日本の歴史、民族教育を行なっているのだから、朝鮮人や韓国人が外国である日本で民族教育することに介入するのはおかしい。

そうしてみると、イデオロギー差別をしているのは日本政府ですね。

第四章映画ですが、元々2人は映画に関するプロ。すでに第一章からずっと数多くの映画について触れてきています。ここでは今後の映画、シネコンを越えて映画館がどう変わっていくのかなど、これまでの歴史的な数々の映画を語っています。プロデューサーの李さんは今後の可能性として「僕が一番やってみたいのは手塚治虫の作品を全部映画にしてみたい」と語り、四方田さんは賛同しつつ漫画家の声を伝えています。「今までさんざん漫画をバカにして有害図書とか何とか言っていた者が、今こそ誇れる日本文化云々。ほっといてくれ今更日本代表なんて」と。

映画の話の中で私は李さんの発言に思わず大声で笑ってしまう箇所がありました。若松さんのエピソード。「私は若松さんは監督というよりも優秀なプロデューサーだと思います」「あの人には難しい思想なんかありません。」と湯布院映画祭での話。若松さんは「シンガポールスリング」という映画で参加、主演は原田芳雄。オーストリアで撮ったアクション映画。「上映が終わってディスカッションの場で皆にケチョンケチョンに言われたわけです。何ですかこれは訳が分からないですって。日本から全共闘の生き残りが逃げてそれで向こうで犯罪を犯す映画なんです。ボロクソ言われるから若松さん席立って怒っちゃってね。『お前ら世界同時革命を知らないだろ!』って。皆きょんとしてました。」若ちゃんらしい! この本は北朝鮮、ヘイトスピーチ重いテーマを当たり前で原則的な解決を語り合い、明るさが貫かれているのは映画を通して世界を、社会を深く捉えてきた2人の意気が合っているせいだと思います

た。すつと読み終えて「そうなんだ」と納得する本です。(5月1日)

\*\*\*\*\*

5月1日に届いた「ジャスミンの残り香—『アラブの春』が変えたもの」(田原牧著、集英社)を、昨日今日と、一気に読みました。

著者が、エジプト・シリアなど、アラブの社会の当事者と熱く語りながら、自らの生き方を問い返し、そしてアラブの事件の現実を記している熱い生身の実感が伝わります。第一章では、革命から軍政に移ったあとのタハリール広場へ。目撃した熱い日々を語り、「すべては徒労だったのか?」と問い、第二章では「ジャスミンと紫陽花」として、あの2011年のエジプトやチュニスの「アラブの春」と、日本の3・11の「紫陽花革命」と呼んだ脱原発の闘いを問い返しています。第三章は、内戦初期のシリア潜入記の様子、そして第四章『アラブの春』からイスラームの春、終章は「強さ」というタイトルで、エジプトの「裏切られた革命」(ムルスイ政権にも又クーデターにも)を経て、革命を問い、己自身の価値観を問い定めていく姿が記されています。私はこの本を読み、もう一度3つの関心角度から読み返しました。一つは、私自身の思い入れにすぎないけれど、実感の追体験の関心、二つには、情報とその分析への関心、三つ目は、著者の問題意識の変遷・総括への関心角度です。一つ目は、著者がアラブの地を、足で確かめながら書き記していることに由来します。書かれている国々や街、タハリール広場からリビアのセブハ、シリアのダルアまで、サウジアラビアとオマーンを除くと、かつて私が何らかの理由で訪れたことのある地。何気なく記された数々が、私を熱くします。その記述に、眩めくような既視感が湧きます。そして数々の事件に、かつての事件を重ね、記述の中に知人友人が浮かびます。2011年のタハリール広場、ムバラク打倒の熱気の中の人々、人々が互いに支えあう姿は、82年、イスラエル包囲下のペイルートの光景に重なります。昨日までのストリートボーイのような少年・青年たちが、あつという間に銃をとり、町のゴミを回収し、年寄り避難させ、臨時の「困りごと受け所」を作り上げる。もちろん、タハリール広場の、危険の中の希望と、空爆で視界が曇った中で、イスラエルに一步も引かない危険のペイルートは、時代も条件

も違います。それでも何かを実現する為に、不退転に命を惜しまず無償に尽力する姿が重なり、胸を熱くします。又、ヤルムークパレスチナ難民キャンプ。ドクトーラの居たそこから、マイクロバスでダマスに向かい、ハムディーエスークで物色し、ミダーンでお茶して名物の菓子を買って……。PFLPの友人、そうか彼は死んだのか……。ゲバラに似ていると生前に言ってあげたらどんなに喜んだらう……。二つ目の関心角度。情報と分析。この本のもっとも読者を引き付けるところです。ていねいに事件を追い、自分が足で感じたことを記し、立体的に2011年「アラブの春」から2014年のIS登場までを記しています。アラブ各国の出来事を日本の新聞を主な資料とするしかない獄の私には、とってはがゆいものがあります。アラブ世界は一つにつながっており、一つの国の出来事は他の国と連動し、更に世界と連動して動くのです。その為、一つの事件を、アラブ世界の連動する動きととらえないと、一国では動態が見えにくく潮目を読みにくいのです。そんな私にとって、情報・決して新聞に載らないようなそれらや分析が、全体的にとらえやすく、それらは時として皮肉な批判に満ちていますが、とっては学習になりました。第三は、著者自身の問題意識の変遷についてです。初めての海外旅行が中東へ86年。「少し前まで、自分は周回遅れの学生運動にかかわっていた」「ご多分に漏れず、自分も大学で大手の政治セクトとのつびきならない対立に巻き込まれ運動から離れた」著者。腐るほど語りながら見ていない生の革命運動の現場を訪れたいと、以来、結局記者としてアラブを知り学び、「アラブの春」を経て2014年再びカイロを訪れます。タハリール広場で闘った、ムバラクにもムルスイにもスイスイにも対決した青年たちをとらえ返しながら、自らの革命観を問うていく、それが終章です。「革命」は徒労だったのか?と。2011年のムバラクの政権打倒の闘いは、レーニンやアンナ・アーレントの観点からは徒労どころか革命すら当てはまらないにちがいないと。著者は言う。「革命の理念が成就すること、あるいは自由を保障するシステムが確立されるに越したことはない」「しかし完璧はシステムはいまだなく、おそらくこれからもないだろう。そうした諦観が私にはある。革命権力は必ず腐敗してきた。革命が理想郷を保証できないのであれば、人々にとって最も大切なものは権力獲得やシステムよりも、ある体制がいつどのように墮落しようと、その事態に警鐘を鳴ら

し、いつでもそれを覆せるという自負を持続することではないか……。革命観を変えるべきだと、旅の最中で思い至った」「権力の移行としての革命よりも、民衆の間で醸成される永久の不服従という精神の蓄積こそ、最も価値のあるものと感じていった」それはまた、ジョン・ロックの政府の権力濫用に人民は抵抗できる革命権と同義なのだと著者は捉える。しかしどうか……と、私は考えてしまう。権力獲得か、永久の不服従か、二項対立的に観念を対置するものではなく、現実を連動している。「正義」も相対的なように、当然「完全なシステム」はなく、権力も又自明だろう。だからこそ、人々の選択を可能とさせる闘いは続くし、アラブ人は「徒労」という問いすら場違いと感じるように思うのです。「諦観」を潜り抜けた著者自身の立ち位置として定めるのはわかるけれど。エジプトの現実をアナロジーするのはどうだろうか。著者も日本人の一つのアラブ人観を記している「IBM」について。「『IBM』というのはエジプト人を揶揄する造語だ。本来の意味から離れて、『I』は『インシャラー(そうだといいね)』と確約しない逃げ口上として使われ『B』の『ボクラ(明日)』は、役所で必ず聞かれる怠慢の代名詞だった。『M』は『マレーシュ(気にするな)』と、自分に落ち度があっても決して非を認めない姿勢を意味していた。つまり『IBM』とは外国人から見て『自分勝手にいいかげんなエジプト人』というネガティブを集約した表現だった」と。「IBM」は、アラブ人が主語になったり在アラブ日本人社会のアラブ人観とも言えた。しかし、と私は思う。「IBM」は「欠陥」や「ネガティブ」ではない。これこそアラブ人の「強さ」だと思うのです。服わない、屈したふりして屈しない生き延びる思想の強さはそこにある。「永久の不服従」もその内にすでにあり、しぶとく狡猾に、しかし寛容に楽天的に、更に時代をつくり出していくに違いないと思うので



The lingering scent of jasmine

集英社

す。反植民地闘争をずっと闘い抜いている彼らは、「裏切り」を何度も潜り抜けてきた。タハリール広場の青年たちも、「アラブの春」に立ち上がった他の地域の若者たちも、著者の諦観に満ちた鋭角な思いを「インシャアッラー」(神のおぼしめしのままに)暖かく包み込んでいくでしょう。(5月4日)

\*\*\*\*\*

「革共同政治局の敗北1975~2014あるいは中核派の崩壊」(水谷保孝・岸広一著・白順社刊)を読みました。読んだ直後、思わず「うーん」とうなっていました。様々な意味からです。

1960年代以来、第二次ブント崩壊以降も戦闘的に闘い抜いて来た革共同(中核派)がなぜ分裂したのか。かつて革共同政治局の「左派」として、議長清水丈夫さんと共に中核派を導いて来、2006年に離党した著者2人の総括として、党内闘争を全面的に開示しながら、本多書記長なき後の1975年~2014年にわたる政治局の問題点を切開した稀な本です。

私はアラブに在って、日本の左翼運動の実情には疎い上に、中核派は距離があったので、親和性の無い事件が多く、そういうことがあったのか……と初めて接する中核派の歴史でした。

「緒言」で、まず、446頁にわたるこの本の著者の意図、構成、批判点が概括的にまとめられ、その上で、かなり詳しい事実関係に沿って、清水丈夫さんの指導のあり方、「ダブルスタンダード」「保身」なども暴き出しています。

まず、執筆動機を目的として「本書のテーマは革命的共産主義者同盟全国委員会(革共同、いわゆる中核派)の分裂と転落の歴史、及び実相の切開である。これは、筆者らにとって臓腑をえぐられる程辛いものであり、元同志らを

はじめ、左翼運動に関心を持つ多くの読者の皆さんにとっても暗く重く失望の念を禁じえないような、幾多の事象を綴ることになる。しかし、どうしても書いておかなければならない、と著者らは考えたのである。

一つは、革共同の党員および党籍をおいた者には、リンチ・クーデターをめぐって起こった数年にわたるすべての事実を知る権利があるということである。

二つ目の理由は、2013~2014年にかけて出された革共同50年史(上)(下)の内容が、清水丈夫による「全編これ嘘と歪曲と居直りの書である」こと。

三つ目の理由は、「革共同はすでに死んでいるということである」とし、「革共同ならざる革協同」は歴史の屑籠に放り込むべきだし、そのようにしてこそ「次代の青年労働者学生たちが、我々の時代の輝きと敗北を教訓として、自ら進むべき道を切り開くことにつながるだろう」としている。

そこに示されているように中心的には革共同の党内闘争の発展的展開であり、革共同と共に闘う人々の教訓を示す責任を意図として記されているものです。

本書の構成は、「序章では、革共同あるいは中核派とは何であったのか、その輝きと誤りについて概括的に述べる。第1部は、06年3・14党内リンチのドキュメントである。そして、今日の革共同の墮落しきった惨状への批判であり、筆者らの自己批判名である。第2部は、本多書記長が惨殺されて以降の革共同政治局史を会えて暗部を抉り出す視覚からほぼ全面的に明らかにしたものである。本多時代の革共同の重大な誤りについても自己批判的総括の視点を提起した」と、著者らが話している通りです。

各論的に記されている批判点は、「緒言」の中で、清水議長らの「50年史批判」として、エッセンスをまとめているので、それを記しておきます。

「現在の革共同指導部が右翼的清算主義と歴史偽造している点で、次の諸点は重大である」として、6点挙げています。

①何よりも『動労千葉特化路線』『階級的労働運動路線』の名によって、各共同が深化・発展させてきた革命論・革命戦略と戦闘的労働運動論を歪め否定し、革共同の歴史を動労千葉主義で、ことごとく偽造している。根本的には戦後日本の労働者運動の豊かな経験と様々な苦闘をないがしろにしている。②70年華僑青年闘争委員会糾弾を受けて、7・7

自己批判とそれにもとづくアジア人民・在日アジア人民への7・7自己批判路線(血債の思想)《重信註:これは華青闘から中核派の入管闘争論を、魯迅のことばで批判された中に“血債は必ず同一物で返済されなければならない”としるされていたことにゆらいている。その指摘を受けて、中核派が自己批判宣言した。》を血債主義と罵倒して、全面否定するに至っている。③安保・沖縄闘争が日本革命・アジア革命の核心をなす戦略的闘いであること。革共同はここに死力を尽くすべき党であることを押し隠している。④80年代に革共同が文字通り総力をあげた三里塚基軸論にもとづく、三里塚第二期決戦の展開を驚くほど過小に低めている。⑤89~90年天皇決戦を始めとする対権力武装闘争をことごとく清算している。⑥本多書記長が最先頭に立ち一人ひとりが血みどろになって革命の命運をかけて闘った対カクマル戦争の革命的意義を抹殺し、単にカクマルとの政治軍事情勢の問題に解消し、かつ対カクマル戦争の持つ矛盾の内在的な総括から逃亡している。これらは、06年の党内リンチ以降、一気に前面化した。」

この6点は、政治局の総括方針討議を歴史的にとらえ返す中で、様々な形をとって、局面局面で対立していた姿が2000年代以降徐々に筆者ら「左派」と対立していった姿でもあります。

本書では、中核派の歴史、リンチ、スパイ問題、杉並区選挙戦、千葉動労の中野洋さんや関西の中核派のこと、私にとってははじめて知ることばかりでした。(公安調査庁の誘引役が69年10・21の日、田宮さんが裏指揮所として「マスコミ反戦」の神保さん宅を借りたが、その神保さんだというのは驚いている。当時はスパイ活動してたと思われないが、あの日神保宅を出たあと、私は任意同行を求められ、振り切ったが前田さんは逮捕状が収監状が出ていて、畑の中に逃げたが大捕り物で捕まったのを思い出しています。)

著者が指導部の一員として責任を明らかにし、覚悟を決めて紳士に総括しようとする姿勢とその努力には、まず敬意を表します。

その上で、2つの点について記しておきたい。一つは、「革命暴力」についてと二つは「党指導部」について。

まず、私が中核派に「悪感情」を感じてしまったのは、その「暴力性」です。66年明大学費闘争における「2・2協定」(2・2協定とは、66年1月30日の徹夜団交に機動隊が導入された後、事態の

收拾のため当時再建全学連初代委員長になって間もない斎藤克彦さんら、明大ブント指導部が、学生らに囃らず、2月2日理事会側と闘争妥結の協定書を交わした。)の不当に怒り、明大書館に中核派集団が連日乗り込んで、学生会室にいるブント系学生たちをリンチし、自己批判書を書かせ、自治会備品を壊し、スプレーで落書きするという行為をくり返したことです。当時、明大二部政経自治会に数人の中核派もいたし、ML派も学館に沢山いましたが、暴力をくり返すのは外部からの中核派だけでした。

当時、無党派の私は、もちろん「2・2協定」反対でしたが、中核派の暴力に止めに入ったり、騒いで批判したら、殴られそうだった。MLの島山さんが「中核派は斎藤を追い出し、秋山を委員長にするためにゲバルトをかけているんだ」と言っていたが、ブントに自己批判させ、中核派委員長にするための戦術だったと私も思いました。「暴力で物事を決着つけようとする中核派」が以来嫌いになったものです。逆に殴られても「自分たちにも責任があるから」と自治会室に残り、黙々とスプレーを消していた学生たちに同情し、誘われて明大社学同再建に関わったことから、私の党派としての活動が始まったのでした。

本書で、自己批判的に記されているように、10・8闘争前段での中核派による解放派高橋幸吉さん半殺し事件は、当時から怒りに震えた者でした。あの当時の「内ゲバの武器を権力へ!」と10・8闘争の初角材武装となったのを聞いて、胸をなでおろした一人です。私自身としては、中核派のこうしたあり方こそ3・14の「リンチ事件」を深化させて問う必要があると思うのです。革マルとの分裂にはじまる「暴力性」は、他党派にも向けられ、全学連再建でも持ち込まれ、権力との闘争が激化すればする程、肯定されていきました。中核派だけでなく、新左翼にも広がっていきました。

新左翼運動は豊かな創造性と戦闘性をもった良質な側面はありました。しかし、党派は、スターリン時代の「一国一党」の観念から自由でない分、自らの党の唯一性に拘泥し、「無謬の自らの党」の存立のために、他党派を否定するあり方でした。リーダーたちの狭量な競争心は、豊かで戦闘的で自由な学生、青年労働者たちの多様な持続的発展を損なったと言えるのです。

「革命暴力」は、階級敵のみに対する手段の一つで、徹底した「階級」としての自己肯定と自己防衛の手

水谷保孝 岸広一

# 革共同 政治局 敗の局 北 1975~2014

段であると思います。しかし、闘う者たちへの暴力は傲慢な自己肯定と自己保身でしかないのです。「3・14事件」から著者らはとらえ返し、10・8前段の事件、連合赤軍事件を外在化してきた誤りなど、真摯に記していて、新しい克服への視野を提起していることは評価したいと思います。

もう一つは、党指導部について。今回詳しく読んでみて、指導のあり方、相互関係がとて家父長的な組織であることに驚いています。著者らは、「革共同の限界」を問い、「組織論における反スターリン主義の不徹底」って「便利な言葉」として切開を妨げてはいませんか？ 清水さんら党中央のあり方は能力以上のことが問われ、学ぶよりも、「指導」に汲々とし、隣にいる同志が競争相手で信頼仕切れていないのが革命党として不可思議でもあります。指導者トップの質は、やはり全党を規定します。指導者の質として（本書を読む限り）多分本多さんと清水さんの違いは下部からの吸収（学ぶ）能力、姿勢の違いが確信と求心力の違いとなっているのだと思います。「地下指導部」であればある程、「大衆点検」を党が受ける構造が工夫される必要があります。

私自身の教訓としても「個」の強化や個の強さや積極面で結び合うよりも、むしろ弱さを互いに把握し、指導の変革にまるごと一つになって、党员のために服務しようとする自己変革の姿勢こそ指導であり、必要だと思えます。

著者らの率直で誠実な検証は、しかし、「党内のどちらが正しいか」といった論点を超え切れていないところにもあるように思います。正論を得ているのかもしれませんが、私のような部外者には正論を対置した党内闘争そのものに映ります。その意味で、第11章で、「革共同の敗北から新しい道へ」と中核派を運動総体の側から相対化してとらえ返し、開かれた方向への提起を評価したい。

そしてまた、現在の清水丈夫さんらはこの書に対して同意的に変革へと歩むとらえ返しが行われるでしょうか。その点を注視したいと思います。

(6月7日)

#### 129号の誤植の訂正とお詫び

- 3頁4行 承認を認める→承認を求める
- 5頁右列下から3行 ジャーナリス地→ジャーナリスト
- 6頁左列16日の6行 メバンド→Xバンド
- 6頁左列3行下から3～1行「の句と共に～と考えています。」削除
- 6頁右列8行 本部横→本部棟
- 8頁右列下から21行 自民党だった→自民党幹事長だった
- 6頁右列13行と14行 書名→署名
- 9頁左列下から1行 枝葉桜→枝垂桜
- 10頁右列24日の8行 考えて船いる→考えている
- 11頁右列下から4行 紫苑→支援
- 14頁左列下から6行 爆殺→暗殺

#### 後記

戦後70年、70年前のことを思い浮かべています。私の家族は福岡の市内の大きな屋敷を4世帯で分けて住んでおりました。ガラス窓やガラス戸に細くきった新聞紙を格子に貼り付けて、ガラスが飛び散るのを避け、空襲のために防空頭巾をかぶり、サイレンの中をまだゼロ歳の弟を柳ごおりに入れて、庭を掘って造った防空壕に近隣の数家族と一緒にぐりこみ、空襲が去るのをじっと待っていました。もし爆弾が落ちたらあつてなくつぶれてしまうような土を盛っただけの防空壕でした。今思い出すと、怖いというより、見上げる空が赤や黄色や緑の光の線が交錯してきれいだなあと眺めていたように思います。終戦の年の春、祖父が自害しました。祖父の思い出は、立てた指揮剣に両手を添えて勲章がずらっと付けられた軍服を着て、軍帽をかぶり、背をピンと伸ばして座っている写真に象徴的です。祖父の葬式の日、私は4歳で、まだ死の意味がわからず、いとこたちが沢山集まっていたので、楽しくて屈託なく遊びまわっていました。ふと母が泣くのを初めて見て、やっとなんか起きているのだなと知りました。ずっと後になって聞いたのですが、祖父は陸軍のかなり上部に所属していましたから、日本が敗色濃いことを知っていて、その結末を見るのが耐えられず、短刀で首を切って果てたのだと。母によると、祖父の執念は厳しかったけれど、自分も常に正座を崩さないような人だったそうで、自己に厳しく自分を許せず、自害を選んだのでしょう。安直に戦争へと突き進んだ日本の軍事政権の愚かしさを思い知ります。安倍首相は戦争から何を学んだのでしょう。(Y)

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル5階  
救援連絡センター気付 「重信房子さんを支える会」  
郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

## 「正誤」表

### 第 130 号

- ①2P(暑中見舞)左から6行目 阿部政治を→安倍政治を
- ②4P(5/11)下から9行目 「宗教戦争」→「宗派戦争」
- ③5P(5/13)上から8行目 海兵隊使用→海兵隊仕様
- ④5P右下から8行目 ジャミール首相→シャミール首相
- ⑤6P(5/15)右上から12行目 ~手引かれし学者の道→学舎の道
- ⑥6P(5/18)右3行目 安倍とつまんで→安倍とつるんで
- ⑦6P(5/18)右3行目 改憲する流れは流れはほんの→改憲する流れはほんの
- ⑧8P(5/22)左上から14行目 高専の加減→光線の加減
- ⑨11P(6/4)左下から10行目 カルロス・モネデロベネズエラ  
→モネデロはベネズエラ
- ⑩11P(6/4)左下から8行目 「緊急財政反対」→「緊縮財政反対」
- ⑪11P(6/4)左下から6行目 ~の躍進で、スペイン→~の躍進で、秋のスペイン
- ⑫11P(6/10)右1行目 6月3日の血糖検査→6月3日の血液検査
- ⑬12P(6/11)右上から9行目 アイネ・ヘルウユ→アイネ・ヘルウエ
- ⑭13P(6/17)左下から6行目 永田和弘→永田和宏
- ⑮13P(6/21)右下から12行~13行目 そえは当然→それは当然
- ⑯16P右下から9行目 ムバラーク→ムバーラク
- ⑰17P左下から10行目 アンナ・アーレント→ハンナ・アーレント
- ⑱18P(タイトル)左上から8行目 1975~2014 あるいは→1975~2014 —あるいは
- ⑲18P左上から9行目(著者名) 岸広一→岸宏一
- ⑳18P左下から14行目 ~を目的として→と目的として
- (21)18P右上から3行~4行目  
「どうしても書いておかなければならない」(カギカッコ)
- (22)18P右上から6行~8行目  
「革共同の党員および~知る権利がある」(カギカッコ)
- (23)18P右上から14行 「革共同ならざる革協同」→「革共同ならざる革共同」
- (24)18P右上から20行~21行目 ~共に戦う人人々の→~共に戦う人々への
- (25)18P右下から19行~18行目 自己批判名である→自己批判である
- (26)18P右下から18行目 惨殺→虐殺

- (27) 18P右下から17行目      ～局史を会えて→敢えて
- (28) 18P右下から15行目      革共同の重大な誤り→若干の重大な
- (29) 18P右下から14行目      著者らが話している→著者らが記している
- (30) 18P右下から6行目      各共同が深化→革共同が深化
- (31) 18P右下から4行目      千葉主義→千葉唯一主義
- (32) 18P右下から1行目      70年華僑青年→70年、華僑青年
- (33) 19P左上から7行目      血債主義と罵倒し→『血債主義』と罵倒して
- (34) 19P左上から12行目      三里塚第二期決戦→三里塚二期決戦
- (35) 19P左上から17行～18行目      カクマルとの政治軍治力学→政治・軍事力学
- (36) 19P左下から9行目      紳士に→真摯に
- (37) 19P右下から21行目      高橋幸吉→高橋孝吉
- (38) 19P右下から20行目      ～震えた者でした→震えたものでした
- (39) 20P右上から3行目      ところにもあるように→ところもあるように